

特集 食品業界の知財戦略

インタビュー 「美味しさの特許戦略—官能評価の留意点とその活用」

① 三枝国際特許事務所副所長 中野睦子弁理士

消費者が最終的に食品に求めるのは、「美味しさ」である。このため、味、香りまたはテクスチャーといった「美味しさ」を効果とした特許出願も増えている。中野睦子弁理士に“官能評価の留意点と有効な活用”について話を聞いた。

— 「官能評価」の長所と短所は？

官能評価の最大の長所は、人間の「美味しさ」の感覚をそのまま反映できる点である。また物理的・科学的測定よりも簡便で感度も高い。一方、短所は、人間が評価するため感情や主観が入りやすいこと、パネル間で評価基準が相違するため判断にバラツキが生じること、評価する試料の感覚的特徴を言葉で定量的に表現することが難しいことである。

— 官能評価で信憑性の高いデータを取

る必要性和そのために重要なことは？

官能評価が、機器分析手法と比べて、客観性、精度及び信頼性に劣る方法であることは否定できない。このため官能評価で得られる結果を客観性の高い科学的裏付けに近づけ「あてにできるデータ」にするためには、確立された官能評価手法の中から目的に応じた手法を選択する必要がある。このためにもまず官能評価の目的を明確にすることが重要である。そうすることで、どういったパネルを何名使用して、どのような官能評価手法を用いてどんな統計処理をするのかが見えてくる。またパネル間で評価用語や尺度を共通化して内的基準を揃える工夫も必要である。そのためにはパネル全員が明確に



イメージできる評価用語を選択することも大切である。さらに、パネルへの心理的生理的影響の少ない環境作り、分かりやすい評価シートの作成も重要である。このように信憑性の高いデータを取得してこそ、初めて平均値や統計処理による有意差検定結果が確からしいもの、つまり高い客観性と正確性を有したものになる。

特に官能評価に基づいて「美味しさ」を謳った発明では、進歩性のみならず、明確性、サポート要件、及び実施可能要件などすべてがその結果をもとに判断される。このため、信憑性の高いデータをとることは特許取得に極めて重要である。

— 官能評価の適正なパネル数は？

分析型評価では、極端な話、味覚感覚が優れた専門家であればパネルは1人でもよい。しかし常に1人では負担が大きい。そこで、通常はこの者に近い評価基準をもつ5～10人程度のパネルが確保される。但し、5～7人で統計学的有意差

(危険率5%以下)を出すにはほぼ全員が同じ回答をする必要がある。つまり、少人数で統計学的有意差を出すためには、味覚感覚が優れ、内部基準を統一する等の訓練を受けた専門パネルを揃える必要がある。多少のバラツキがあっても統計学的有意差を出すためには、それ相当数のパネルを用意する必要がある。

— 官能評価に基づく発明の強みは？

官能評価がもつ本質的な曖昧さは、前述する試験方法等の工夫により較正することが可能である。明細書に記載された官能評価は、こうした較正により確からしい結果として記載されていることを前提に審査される。このため、明細書において、クレームの各要件（パラメータ）の技術的意義が明確に説明されているとともに、それが官能試験によって矛盾なく統計学的有意差をもって裏付けられると、非常に強固な発明として権利化が可能になる。これは官能評価を効果とした発明の強みといえよう。